





絨透あり振り梅のありあひて  
糸糸のりや夏の雨に糸糸あえ  
後

漢毛丸

苔丸  
野

下

尾陽女を檀本堂主人荷今子集を編  
て名をあらはせしむ河原に此女有り成る寸  
多をあらふに母の心よりよきと給此婦不願を  
したるに忠告給ふの如き力を此目と以て  
その目をわけて捨て去る日まはせふやちり  
はあやなるといふもいふをこれり一々柳  
橋の錦とて并してふらひのまのうらみなる  
風情ありつらき心づくら實をそとて此女を

何れもその心を以てての所なりと云ふ所の  
 こと其有らざるは其の心を以てて其の心を  
 以ててその心を以てて其の心を以てて其の心を  
 以てて其の心を以てて其の心を以てて其の心を  
 以てて其の心を以てて其の心を以てて其の心を  
 以てて其の心を以てて其の心を以てて其の心を  
 以てて其の心を以てて其の心を以てて其の心を

元禄二年の事

芭蕉枕書

荒野集目錄

卷之

郭公 月 雲

卷之

初春 仲春 暮春

卷之

仲夏 暮夏

卷之

仲秋 暮秋

初秋

卷之五

初冬

仲冬

歳暮

卷之六

雜

卷之七

名所

旅述懷戀無常

卷之八

釋教

神祇祝

貞外

曠野集卷之一

花三十句

よしのふな

二種ありとありもの芳虫  
家ありていほるものありけり  
為見るとけりあるれは林外  
をの山とこととほてをを  
雪と淋し苑の波を思 凡

貞室

路通

信德

晨風

友五

山星小宮とのるのるのるのるのる  
何れも世をこころ人の長刀  
岩沖をよこしとてとてとてと  
をちのなり下を引くすまぬか  
下と下とのありといを越人もの者  
をの山常おくぬる枝と多  
つんあきとくぬるとに海ぬをの海  
くあまのいろとあまといふたの

志白  
去來  
野水  
龜洞  
越人  
一井  
俊似  
鼠彈

ちるるたを酒ぬあへく  
冷けの教でてもよや免の陰  
をの舟舟の雀ら傘おしあ  
柴舟の免吹ふりり者月のおめ  
おる付ふなりて近なりもの枝  
連つるや後身あおあ免の時  
夜宿のゆきとてある免は  
あめふらや風連る免のとき

舟泉  
胡及  
長虹  
卜枝  
鵝歩  
荷子  
傘下  
薄芝

菟ふさしくはくく成心のぬ  
 心苗  
 山あひのたれを夕日にたたり  
 越人  
 ちりし花や理窟をれふ花の  
 野水  
 なるいあひをのたふよりのおきま  
 冬松  
 獨りまうな遊遊ひまうり花の山  
 冬文  
 花のちとこくく花首ぬれ屋上  
 荷今  
 首牛一このゆきのむきを花とる  
 酒のうたたる人の花ふ

月夜もれくく酒のむひとる  
 芭蕉

あら人の山あふくく  
 同

杜宇二十句

ほやいれあを酒をくく  
 季吟  
 花のちくぬやると花り  
 春のちの真し目るつと人知く

目ふるまゝあまふ山時をるるありのふ  
いそりしらふりふゆりり蜀鯉  
躑躅のこゝのふにしくわほと守  
おひー子めのひまのするや時鳥  
流やえん乳のほく野鳥は時鳥  
郭公とまゝあゝとまゝ野鳥の度々

ある人のまゝふてあま向也

こゝの自まをば

素堂

釣雲

越人

<sup>津</sup>松下

重五

柳風

あゝとあまのまゝかりしれを鳥外  
晴ちらあまのまゝあゝとあま  
数尾鳥のまゝあゝとあま  
云々まゝあゝとあまのまゝ郭公

幾鼠彈

落梅

一鳥

同

遊山

あゝとあまのまゝあゝとあま  
あゝとあまのまゝあゝとあま  
あゝとあまのまゝあゝとあま  
あゝとあまのまゝあゝとあま

風泉

春雨

傘下





峠を忍抱く日さあはる——  
つ危やいあいあささるるあ  
名月しきあおあはるるあ  
名月やとに十二あ名ああ  
名月やあはらあてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
名月やあはらあてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟

任地  
亀洞  
越人  
文鱗  
昌碧  
傘下  
二水  
野水

名月のいえなり

あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟  
あはらやあはらてはらく舟

荷子  
同  
去來  
胡及  
釣雪  
一舞

十三夜

新梅の枝をぬねる日

秋風

朔日

蒼い月夜の氣を海に果

荷亭

二日

見るとあられの夕暮

全

三日

仙事絶えてふも似て三日

芭蕉

四日

夕日映あそびてるを

卜枝

五日

何日とてあそびたか

伊豫 一白

六日

浪川を渡る日

世崎 鶴聲

七日

能くといふれて海

岐阜 一髪

雲二十句

大津のそと

雲の目や帆はとりの影のいろ  
 心づゆけぢ雲つるふこ強ぬ所まで  
 竹の雲をたつておるなく荏やぬ  
 むらなるや雲のある山はのやま  
 車道なるならくあるのありたふ  
 その雲を越つてかた影を流さる  
 其角 芭蕉 塵土 京か加生 小春 越人

その雲をふたぬぬぬるこの為りれ  
 えのあなるのぬぬぬて雲のつるのれ  
 くらぬらぬふお影るをたり雲の隈  
 雲をたつてさるたふさいる荏やぬ  
 雲の雲をたつてぬぬぬふたぬれん  
 雲の目や川流をたつてぬぬぬと  
 物なるぬたふらなるもの雲をたつて  
 雲の目や大舟をたつてぬぬぬのれ  
 是幸 松芳 二水 鳥仙 除風 路鳥汗 傘下 芳川

冬の初め 終日 なるまゝ  
冬は昔にたかきりや 宿の  
ちりしや 流るるを ぬれぬ 故  
左の 冬も やまを へて 隣  
はあしれし 冬も のま あり 処  
舟の けしき いくら ぬき とも 海

冬文  
桂夕  
荷夕  
踏通  
野水  
芥川

曠野集卷之二

上歳旦

二日とぬめりしや けのまのま  
多き人の けのまのま けのま  
けの水や けのまのま けのま  
松のまのま けのまのま けのま  
けのまのま けのまのま けのま  
けのまのま けのまのま けのま  
けのまのま けのまのま けのま

芭蕉  
古梵  
風鈴軒  
其角  
文麴  
去來

此のるらふたてて年ぬる拍あふ  
えぬあゆ何とちきまいと近き下  
え日あめあまあまあまあまあま  
齒圓ふたあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ

一晶  
踏通  
一笑  
如行  
落梧  
亀洞  
同  
昌碧

えきあひあひあひあひあひあひ  
小搏子あひあひあひあひあひ  
とく男千秋あひあひあひあひ  
山柴ふらあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ  
あひあひあひあひあひあひあひ

元廣  
舟泉  
同  
重五  
釣聖  
同  
一井  
胡及

日なきまじいわ新まこの年純海  
くねとをその縄ぬかむとく柳か  
うたぬ娘やふらうの面いられとる  
きき茶や舟の面のみんなくそ  
佛よる宗るそあそとらいつか  
のくまやとく一の目まいらなぬん  
あつらふりたりあつらいつか  
正月の魚のめいぬあ炭たりと

長虹  
蟲彈  
同  
瑞水  
と丸  
朴什  
冬文  
傘下

くねのまきぬぬかむとる団ぬぬ  
あつらふねちらうとあそく強や  
大勝るを年のもまふの白ひ  
雪のまゆゆまじい色とあそと  
傘ふ上遠乃末ぬとらりえ名柳  
柳あつらて松のまふ柳有る  
あつらふらうとあそく強や  
あつらふらうとあそく強や

冬松  
柳風  
隋川  
昌勝  
夕道  
梅舌  
野水  
同

そのまゝのあつてこゝろ之賢真実  
 袖もや演名をの指代今よこは  
 ちのやまの清澄ふらふのま原  
 万葉のやまを降ふのふり  
 己のこゝろをさしつゝのまをたおる  
 我らまを回あつてふらふのま  
 とはまをたおるふらふのま

越人 同 荷今 同 僧 般齊 貞室

神春

若葉のこゝろを本を刺細めぬ  
 猪牛のこゝろを福とてさしつゝのま  
 七つをたこゝろをさしては子外  
 女牛のこゝろをさしては子外  
 刺滑て殺のたをた破葉ぬれ  
 吾こゝろもあつてまをたぬま  
 不効くつちこゝろを梅わらへる  
 鶴若くつちこゝろを梅のこ

越人 野水 俊似 小春 藤羅 素秋 玄察 鷗上村



ふきわたるもの氣ふらぬり地外  
寂かなる夜もさうふねん梅のを  
梅のうらたつりやあまの影あは  
免もれのことしあまのあいにあは  
みのよしとあまのあはる梅のさあは

細代民部卿の息ふきこ

梅のあふささきやうらたつ梅のを  
うらたつあまのあはる梅のさあは

越人

落梧

一髪

冬松

蕉笠

芭蕉

若風

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

あまのあはる梅のさあは

去來

一桐

一筵

市柳

夢之

梅舌

野水

塵之

行人の心其後をふ積ぬかす  
かきまきやほつたあはれ  
うきあはれあはれ  
あはれ  
繁もろもゆるあはれ

冬文  
芭蕉  
傘下  
路通  
荷子

のらたらしとぬきのぬき

舟泉

接木

つまのつかに  
たる継徳ナ

傘下

暁の物替ぬふらるの

荷子

同

寂しく懸る氣のつらぬけ

ト枝

春雨

えらぬといせのる

湍水

同

まきのぬかかきしつ時きふん

崩弾

白尾雁鳥

まねぬつれ流つよまきる白尾

野水

柴の井よまきぬかきる下

奇生

ま白りまきまきる明な

電脚十一歳

まこま親子橋まきつは

舟泉

すのま橋まきまきわ

其角

ままままままのまま

蕉竹笠

ま橋まきまきまきまき

塩車

川舟まきまきのまきまき

冬文

ま橋まきまきまきまき

春江

蘭亭の主人池り鶴をまき  
まきまきまきまきまき

池り鶴れまきまきまき

素堂

風の吹まきまきまき

野水

ま橋まきまきまきまき

越人

ま橋まきまきまきまき

一笑

尺をかりそめもささねるやならん  
あさ色しく柳を風よとまらむ  
とりつらそそは式持とほる柳の影  
こそまことそは友のゆらぬ柳外  
三かくて柳よのあるく柳の影  
ぬくぬきふ年のことさしく柳外  
吹風よ色もあつとそまに柳外  
あせぬぬ日とつらなりぬぬ死に

小春  
一矢  
昌碧  
杏雨  
杏雨  
松苔  
校遊

いそゆらそ野原は花をぬ柳外  
鶯啼りしみる影の月の柳外  
あさ柳ふとつと花てぬよの事  
ひいらに後へはふ柳の影  
菊の名もささねるもささねる

荷  
全  
素秋  
馬  
生林

仲春

麦の葉ふに長草のそねかむ嵐  
葉のこやわ長草のそねかむ嵐

不悔  
長虹

なみの海の身委ふらゆる日影外  
 常の心也睡らう妙き縁外  
 うこしやとさるへで細う山林外  
 万葉を結ぶるうて歌集外  
 ひとしきりおそろしう歌集外  
 度度ふと下持しうて歌集外  
 ともくさる歌集しうて歌集外  
 白ひきいほいほわらむ歌集外  
 牽下  
 清洞  
 去來  
 昌碧  
 越人  
 笑州  
 除風  
 一橋

うこしやとさるへで細う山林外  
 万葉を結ぶるうて歌集外  
 ひとしきりおそろしう歌集外  
 度度ふと下持しうて歌集外  
 ともくさる歌集しうて歌集外  
 白ひきいほいほわらむ歌集外  
 牽下  
 清洞  
 去來  
 昌碧  
 越人  
 笑州  
 除風  
 一橋  
 冬松  
 一髪  
 野水  
 除風  
 一雲  
 塩車  
 宗鑑  
 落梧

あらういとおしりくさくさ鳴の 越人  
 いくすなぐし曲もある者のかそつに 去來  
 我入るこえそくあゆくはくち 落梧  
 不圖我て後ふ君かをる蝶は 松下  
 ゆらぬみの夜細ふ心るはくち 一井  
 左の蝶をとりよりのとん生う笑ひて 柳風  
 桜桐のそよにとまうて白胡蝶は 梅餅  
 如やうのかりと生ぬるこころ 歎玉

りまきやまきまきいつのり胡蝶 百歳

みぎたまき

何の氣とつらぬふとこの言はれ 忠知  
 移ふこころしと鳥ふそふぬ言はれ 荷金  
 ちろろろのこころを言ふれ 野水  
 居るこころいよりの言はれ 舟泉  
 方外てあこころ選たす言はれ 鷗市  
 此蝶のこころあこころみ 獨遊

妻船の人のを歌はるるの流の事  
 をけいせいの歌の月ひのまをそ所  
 ほろりこして山吹ららる海のかと  
 松嶋小山吹くすしあめのら路  
 山吹してそふのまをぬ風は  
 下るあまこ山吹のそくゆふへかれ  
 とりつらつてもゆふら歌のそ  
 あそひのそをくそとそふぬ燕外  
 杜園 式之 直蕉 野水 下 襟雪 蓬雨 去來

老まの道まをぬらぬらまは燕外  
 いまさらたといふぬをありの燕外  
 燕の首まを歌ひありぬえつもの  
 蒼色まをたてつらまはる燕外  
 友城まを歌ひありぬえつもの  
 角をまをまはるこまはる小燕  
 なるほふ歌ふか浦の流下外  
 おあも子も同一飲日や桃の海  
 俊似 長虹 嵐弾 且葉 蕉笠 越人 傘下

人あはむと陸の地を  
 舟ゆりて水はぬる躑躅  
 鹿あちあきてるるを  
 舞あはぬのよけぬ鶴あは  
 承ら目や落つて流るまぬ之  
 承ら目や池をぬ本めを  
 承ら目や池をぬ本めを  
 承ら目や池をぬ本めを

友童  
 荷今  
 兼正  
 亀洞  
 下花  
 野水  
 同

曠野集卷之三

初集

二初とあや白からあふも地つ良  
 更衣襟をたすもたさ  
 山路通  
 傘下  
 前弾

尚拙老人の老いたまひし  
 香をさるものなむけふ文  
 かくるる善美の文  
 繁今



山崎のあそび

なり木とてあはせとてはあはれん外  
 芭蕉  
 いちたのう木とこなるらんらんをた  
 一井  
 我の木のあつらひをみるもあはれ  
 越人  
 切らふつあはれをよきと様事  
 不交  
 あはれあはれあはれあはれあはれ  
 藤蘿  
 けきとれくるもの木は此あはれ  
 龜洞  
 せうりくといふあはれはとまる胡蝶  
 竹洞

日ひひてあはれあはれあはれ  
 鈍可  
 をけいあや下り水の沢知 木  
 夢之  
 上ヶたふいのの箱とてあはれ 一徳  
 玄察  
 枯れあはれあはれあはれあはれ  
 生林  
 あはれあはれあはれあはれあはれ  
 不知  
 むらあはれあはれあはれあはれ  
 鈍可  
 あはれあはれあはれあはれあはれ  
 嵐蘭  
 名はあはれあはれあはれあはれ  
 落梧  
 名はあはれあはれあはれあはれ

乃散つて来ふ実をこぼれ  
大粒ふゆふこころ一女子のみ  
さぬまといふ男を拾ひぬ女子を  
吉次 東巡 李桃

深川の舟あそび

菴の奥も寝くなりぬさし一づつ  
かみ一さのみたわふあやのこも  
嵐雲 野水

仲夏

青の留らぬふこころさるる  
六輔 櫻井

川草は鳥をふかせるほつるのれ  
窓くらら陰子ささのるる螢外  
園死ありくらら人呼雀・さ  
道細を迷え終ぬほの螢のれ  
西の夜ふたをかりけりあつる  
早川入袖より生るあた藜  
あつて澄こる袖のほつる  
一髪 不交 風笛 青江 含咭 卜枝 鷗步

さし巻く津やまよとあつる

うららららのらめめめめめめ  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春  
ぬのむき<sup>ツカ</sup>の梅の春の春の春

秋芳

小春

杏園

二水

一笑

胡及

見竹

此橋

作の子にけりけりけりけり  
筆は時をさるるるりの竹  
けりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけり

長虹

去來

野水

一龍

尚白

龜洞

法皇十一年

身室

木乃一不み之申

あひ移るるやあてぬれ之移葉

芭蕉

あふあふ心法

移のほふ舟不きて憐也

荷今

同

あふあふは船も鳴らん移相舟

越人

先ふあひの親也あまをぬ移舟大舟

淳見

田のふ舟のつとえぬうふ移のれ

梅餌

鴨の葉はアハつらあるあてきたり

路通

松笠の縁をさつる身な野のれ

卜枝

虫は根枝かくは野中枝標外

鈍可

菌の花や流ふとこ移る有れ

同

桂子や府法書人をさつと見え

越人

冷や能のこ移る友のあつこ

藤四羅

身の花や鏡火ふは原見ぬる星

且葉

菴のるるこり

すついでいかに死に暮の炭俵 其角  
夕白や秋のいろの鏡の丸 芭蕉  
ゆづりほのさかむる人共をぬこ 野水  
夕白を敷の地ちよひくさの丸 借雪  
山路来て夕暮おもしろの中伊勢柳 市柳  
名をなすゆづりはふ知をさへ 長虹

暮暮

挿毛初くわらなう膝のこゑ 昌碧

窓の曇り瞬か帯はあけむなり 野水  
夕暮ふく傘ぬるゝ 傘下  
あしとふねとやぬ木立の南 去上 去來  
涼よこよ白雨ちかしく入目のふ 去來  
以藤して涼や花のさけり 荷下  
をよこ庭の砂ありぬ見雲の形 同  
た毛をすのふさぎり夕涼み 如風  
我々の髪や茶の下すく 俊似

源の氣樓の下ゆくの残る  
桃籠のこゝめゆり涼三舟  
あゝいづれをきて戻る川を  
吹らうてみるのうへに  
蓮みよひ日かあをたむく  
笠残るくみれく蓮に  
河内首ふみの口移り  
まのくともいふ

全  
ト枝  
未學  
秀正  
晨同  
古梵  
斐水  
長虹

あゝいづれをきて戻る川を  
蓮みよひ日かあをたむく  
笠残るくみれく蓮に  
河内首ふみの口移り  
まのくともいふ  
あゝいづれをきて戻る川を  
蓮みよひ日かあをたむく  
笠残るくみれく蓮に  
河内首ふみの口移り  
まのくともいふ

俊似  
文瀾  
濼月  
尚白  
一髮  
ト枝  
李晨  
越人

孫のむさしむ蘭ふゆるのれ

素堂

曠野集巻之四

初秋

ちかくなやみ勢あとの秋の風  
梧のそよやまといろくろのむ

趣人

松嶋雲居の寺より

圓解

一をよみまゝありてをかりたり

仙化

あつてのちむや秋の夕なる

芥生

男くさ死羽敷をよむのよ四外

杏雨

物白く何處よりぬきありか  
聲も物もあはれなきこと  
あはれもの白くも物もあはれ

芭蕉  
文麟  
荷方

子持のあはれもの白くも物もあはれ

物白く何處の子もあはれなきこと  
隣なるあはれなき事(あはれ)  
あはれもの白くも物もあはれ  
あはれもの白くも物もあはれ

同  
鳴笛  
胡及  
嵐弾

伏見やうらやうらふはなをぬん  
涼しくもなほあはれもの白くも  
睡道ふき物あはれなきこと  
ねむりよめもあはれもの白くも  
あはれもの白くも物もあはれ  
あはれもの白くも物もあはれ  
あはれもの白くも物もあはれ  
あはれもの白くも物もあはれ

去來  
昌長  
踏躑  
一髮  
素秋  
芭蕉  
其角  
舟泉



ひびくことばをばやむる也  
棚伝るるるるるるるるるる  
芳まらるるるるるるるるる  
此を載て出の器はあつるるる  
ゆりやゆりやまらるるるるる

宗祇法師のあまのふにことごと

名ありらぬ小春もはてしなく  
ともしのぬる根ふらふるるる  
素堂  
俊似

仲秋

お籠るるるるるるるるるる  
のこころとてはなをるるるるる  
谷川やよみゆきをり秋のこ色  
石田のまもりゆきをり秋のこ色  
斧の形や輪廻生るあつるる  
扇のまもり人の白くをりるる  
田と畑は指りいふるるるるる

芭蕉  
小春  
益音  
傘下  
卜枝  
一髪  
一泉

山嶺の庵に坐し他りて笑ふありと  
紅毛のふらたがあしは技師の間  
ちがぬ人とおひておる紅毛  
菊の舟に紅毛にぬる之技師  
とことれ地ふとふまのちえ  
つが者あつとせぬのちまふ  
つが者あつとせぬのちまふ

重五  
其角  
東順  
林分  
越水  
宗和  
北枝

つが者あつとせぬのちまふ

加賀

素堂(まろり)

をすの實のぬきりてはる蓮地  
平の草花は強藤一むせうかれ  
松の本ふゆあつとせぬのちまふ  
をのちて夜に花のぬるのち  
ふらあつとせぬのちまふ

越人  
防川  
舟泉  
胡及  
曉龍

同(まろり)

うそ松孫六やうとせぬのちまふ

其角

ついでに

ふみあしをちりて杖のほろよほろ  
いそがしや野たりのたのぬき  
芭蕉 加賀 一笑

暮秋

なるふとなく枝のりさの白く  
さふさふのちりぬき  
巴文 昌碧  
山崎の野角とて又ちり  
越人

一々やれぬる判りをもさあつと

曉籠

荷今うらまはし山崎のたのぬき  
ちりさふさふのちりぬき  
さあつと

かちけの白く  
菊のつゆのりぬき  
二水  
かちけのりぬき  
十箇  
海とちりぬき  
芦

湖のほとり  
芳の穂やまの  
加主  
路通

曠野集巻(五)

初冬

あかしのしほり  
湖春

あかき人ふやき

一畝らるる三井寺  
尚白

たのきき後仙た  
端水

乃白真行ふ

見たり遊子人の  
荷子

八段持くくる目り

白菊を折るころをかりかゝる時  
約めりゆの下の物にこゝろをゆり  
後一ちりかりに舞をるを  
こかじふ二日牡丹のぬき  
一もつづく梅の枝をふふ減ふ  
このころに菊を折るころり  
杜杞の菊人のけする木陰ら

落梧  
秋玉  
傘下  
荷子  
一髪  
同  
同

菊のむらもりのつめて  
利木のつたを折るゆり  
箕月ののつたを折るゆり  
妻をさして身がなす  
のとりーやまなまの  
庭の残つてあたる  
名国のつたを折るゆり  
まのつたを折るゆり

李晨  
野水  
昌碧  
全  
一井  
落梧  
胡及  
文麟

つらとせしを為難ふかざる意に  
か枯し風の体もなる野に  
蓮池のやうにありて枯る外  
響きあはるるをいふ事  
こゝにふかやうに響きあはる  
有る所のあつたをいふ事  
ト枝  
洞雪  
一物友  
松芳  
杏雨  
蕉笠

真月

猶生きく度く月共面白  
野水

あつ漢の人のあつたをいふ事  
俊似

仲冬

おろしを五種をあられる  
を治との見えたをいふ事  
松とある鳥をいふ事  
柴の火をいふ事  
いとける柴をいふ事  
勝吉  
重治  
林の介  
杏雨  
宗之

おれの船せんとく人の実のこぼれ  
舟棚の雪のまふふらつる氷  
ほろぬ氷のさうに眼をさるる  
つらいつらつてまの共あつる氷  
打あきておれをさる氷柱

舟題 雪舟

舟とつとる舟をさる舟  
おのつとる舟をさる舟

壯國 勝吉 俗儀 除風 夜舟

舟弾 荷今

舟をさる舟をさる舟  
舟をさる舟をさる舟  
舟をさる舟をさる舟  
舟をさる舟をさる舟  
舟をさる舟をさる舟

朝霧の舟をさる舟

井名地る舟をさる舟

長虹 一井 亀洞 言咄 忠知 龜洞 村俊

行牛くく谷不実こ正氷空・乳  
海角揚の産程多し即氷空亦  
炭火電の穴始さやも産多し  
膝高石はく先と出らさよこ  
力と何もさ天目しゆりぬ冬核  
いつこくし底起さゆ冬つそさ  
冬氣やまこよりくそん此柜  
冬松  
利重  
亀洞  
塩車  
一笑  
亀洞  
芭蕉

歳暮

餅つらあゆふとあふ酒くそ  
あま書つてと先ぬものなるこ  
もちをの酒らあてかてぬぬ下  
まよゆく揚つこあゆる産物・節  
縁とまこゆにこゆさる乳のれ  
本巻の目りつくる人のみこや  
とくおのこせつらあて  
縁のきこころしとこりからり  
せんとき  
年のもを杯の實りの初くと  
杏下  
尚白  
野久  
龜洞  
一笑  
荷子



門松残うりり多路一筋ひ  
内習  
田代り前道ふあのみ廿外  
龜洞

荒野集卷之六

雜

年中行吉又内十二句

供屠糶白散

荷今

いそけろやとをなめ初るん

春日祭

とーしとに鳥居のふれいふ

石清水臨時祭

昔ももろのふらふらあはく

灌佛

けふの目やいしてふ洗ふ佛連

端午

おとす瘦ては髪をさら髪落

施米

うちめてふとこは米をほ臭ら

乞巧奠

まら栄をふとてはる学をせえとる

駒迎

爪髪見縁のあうらやこ海むえ

撰虫

知のふふや足のおもなるうりす

十月更衣

むーたの衣うをふらぬうた

五節

舞娘に髪とひ指をわらふり

遊難

たそきてや眼ふらふる鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計會

春風春水時來

氷の—流のほらち流まぬ風

白片落梅浮潤水

野水

水ものこしに付くる梅白

春來無伴閑遊中

花下忘帰因美景

花下忘帰因美景

夜ふかはしのりらせとむの下

留春春不留春帰人

寂寞

りたまをこし流らほの野寺に

巖風吹袂衣

不寒復不熱

後照を松色に曳く小のり

池晚蓮芳謝

蓮の香もりの水をさるる乳臭か

暑月合員家何処有客

來唯贈北窓風

涼免りて切ぬるふりりおのまど

大底四時心總苦就中斷腸是秋天

雲の縁それしやるれ秋の夜

夜來風雨後秋氣却然新

秋のふと毛て爪をぬきもか

遅之鐘漏初夜長

取之星河欲曷天

下也と云ふりひまもるうふりて扱をさ

殘影燈南檣斜光月穿牖

霜の夜や泣くも白くもさめり  
万種秋霜相能懐也

白くもさめりも泣くもさめり  
十月江南天气好

可憐冬景似春美

二かしをさめりも息づくもさめり

寂寞深村夜残一雪中

新多ら出るもさめりもさめり

白頭夜礼佛名經

佛名の礼も懐くも白髪も

禅窓の撰ひのこも懐くも

こも懐くもさめりも

鋸鐸月立

舟泉

かを懐くもさめりもさめりも

付木突

六月日 水鷄てのれ人の歌

鉤瓶縄打

かゝるさや海のみふと海女の果

糊賣

あさあぬのころり〜わらじかた

鳥糞糞

二のどれれのみふらぬやうのて

本々夫人

越人

規在何許本是煙引到林處

かけ強ふの抱ゆをころり強ふ

楊貴妃

雲身正半偏新睡鏡見花

冠不敷並下堂

える風小等ゆるきたるの夜血分

昭陽人

小頭鞋履容衣當衣青黛黑  
黙眉之細長外人不見之應笑  
之の教あるやむの妻は後と人

西施

宮中拾得娥眉眉公亦不獻吾

君是愛君

たなわく極くくく杜母の事

王照君

王顔風沙勝畫圖

この木も色もささぬ花柳の事

一目留主

夕

鈎雲

る夜ぬの物や仏供燈火もさす

辰

杜若生ん繪畫の亦新日外

己

溝萩の眠るふりうらな船の舟

午

水あはしと藍うらうらと海あはし

未

蟬のさるふたはあまのりかふふり

申

ふ日あや鶴とあまのりかふり

和山ありて牛乳いり

是根な

凶状

麻笥の上をとりあはれさ 樹水

野鳥

鴨実のけれあはれ自あし 見竹

里虫

枝あしとほりけり 四圍疎外 舎帖



海魚

あまし海と鯨引鳥とちの月 全

川魚

秋の昏鶴川〜のたぬりの草 含咄

牛馬四足是謂天落馬首穿牛

鼻是謂人

一方を梅つく桃の迷木の草 越人

藏舟於欵壑藏凶於澤謂之

固然而夜半有之力者負

之而走

わ〜ちり〜作をの市にあつてい

絶聖棄衆知大盜止

七夕をわらふまふもなれたむら

鏡者天

まぬも〜ゆらり兒女のもをたか 桂夕

鈍者上壽

鳥羽の多きりなるをぬの軍一市凶

藤房

時を鳴やむ時をさるにたり一井

師直

うろくく人ふくむ新外長虫

一休

い強いのあつとあつや月の雲 瑞水

法然

鳴あまのほくろいふふらふら 竜弾

凶山石

おく山を敷ふ城白り岩の角 瑞水

海山石

蒼とりり強ふあむも所りたり 全

曠野集卷之七

名所

八重うすくこ奥とこりたる竜田  
えり奥の由目如武部う大江山  
ゆり濟の松もをより藤ふて  
芋米一把かきとて危りるの波  
磯山はうらうらりあるのぬき

琵琶橋眺望

杜國  
荷今  
芭蕉  
端水  
荷今

おる油る鬼獄をむらふゆきの甲  
園あえて寝てもぬしちころる外

合略

宗濂師

英法は必関といふ不の書

に敵の候たるをきりて候

芳乃野生く布子愛たしあつた又衣

杜國

まらうのや田所とれちる家々の里

童五

五月し由ふかくまぬちのや津田の橋

芭蕉

湖の水海さうりたり五月 雨

去來

牛と風——鳥の羽のあつた

一髪

角田川小亭

いづみのほろはなみの新合良ひふり

自室

見えよめのあいうふ秋立貝のち

破笠

いづよひとほさうしちのあか

芭蕉

夕月必杖ふなる角田川

越人

九月十三夜

夜とふ富士たつそらめりとき

素素堂

鴨実のる尾のともまを羽田の  
 鴨実の言直海のあまはむまこ外  
 去る舟やいくなりともる時  
 湖成尾のひめくまをえ村しく強  
 のく濟やともまりあをやて初時伊豫  
 茂る花も木毎くともる日あは  
 名つじしともる海嵐波物も不真  
 夕これの物蘇輪やをこのたぐ  
 胡及  
 測支  
 舟泉  
 尚白  
 隨友  
 洗悪  
 俊似  
 津一笑

名の富士東危しりふりもなり  
 名野山も唯大者め夕外  
 早津のやまはつらまを鳴子鳥  
 ぬるの目や不破のふか花舞舞  
 湍水  
 野水  
 芭蕉  
 如行

旅

名雀をよ上ふりふりふはの船  
 大和を平尾村ふり  
 名の張福ふ似たり旅ぬる事  
 芭蕉  
 全

揺波墨法駐つて海りり  
日の入や舟小くく竹枕の苑  
のりりや漆の屋瓦生るる  
少くは膝くはふたひぬ衣く

ある人の後別ふ

時ちちこわさへて笑あり  
夜いぬふ言は鏡や我の心  
敷をこたふらふ染めら旅物

夕楓  
一髪  
荷兮  
芭蕉

除風  
冬松  
昌碧

五月雨や柱目を生み市の家  
夕ふふとの大なり一志あり

芭蕉士張送る

福集にこそあるあるあ  
なるくは秋ふする漁舟の聲  
あら風よすかゆのあはれ  
おひそくさくさく糸のあはれ  
夢をさしてすうたをねよんぬ

松芳  
傘下

釣雲  
一井  
野の  
舟泉  
嵐彈

さしふる人ふいひて

文段の月ふく人ふいひて

荷今

幽人旅立ちのしづか

日にし暇あつたを鳥のうへ

野水

たくとまよひたくりつとてわ

芭蕉

野の棠花はもと散れ決めい

路通

物解梅といふお其甲の

ふむをふたくるとて

将聖橋に麻路ちつとて秋の

小荷今

とまりし橋ありまよひ

涼

八月小今えんはちとまり

玄察

能らけし親るあふ打伝る

一井

あ川ふつて今ふりる

澤店の葉残に秋の秋の

文鱗

草花大もまよひくち

芭蕉

旅あまねりうとてあ村

常秀

馬はあつて芭蕉子小多姫て

いくと路もふく程なるを袖とははるす  
若ふつと一羽織と糸の糸小片

荷兮  
野水

其角小つらるといふ

あゝあゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ

荷兮

天竺てこそお徳なるまゝあゝあゝ

越人

めく流のまにまにゆく千鳥か

傘下

里人のこころはうさぎのまも

宗

越人とその田の躰ふさや

まじり色と二人旅中そなたのまじり

芭蕉

旅の夜してはるゝや浮世の縁拂

全

述懐

抄巻を捨てて生る時

ふゆる時を来もろえて流るる也

路通

子我猶守りて田路打燦のま

収宜

余はの田は蛙入ぬも浮世のま

落梧



高野ふく

女もふたふと能なり奥の院  
梅さきくりあつりしるを念共

杜國  
梅舌

高野ふく

父母抱きつりふき一維ふの多  
あやめさすねわさこそ抱ついで  
ささふ入湯我もねみり一盤  
一本のなすびもあまる佐居る如

芭蕉  
荷舌  
全  
杏雨

名月をよめる天子ふくゆるせ老の友  
似とくや白髪なふぬりく麻木賣

秋風  
亀洞

九月十日素堂持尊小て

めく終わごとを言末の中はゆる菊  
のこ家をも身ふるさつめ道徳外  
人のちりしあつり終る

山嵐  
曉籠

さきとくころあもたらさふの如く  
田里の人ふと所らなま

芭蕉

二あじのなまふもある山のふか 杜國

鎌倉君建長寺まふて

唐茶ふめくもあはゆふゆたあもあな 越人

ある人よといふらひあはゆふて

唐茶ふ残一ひ新たくらぬあ

あふきたる唐茶ふ不替や鶴より 荷子

古らのるもあはゆふて

唐茶ふもあはゆふて次人鶴より 鼠彈

摺の火ふ親子もさ寸徳収ひ 去來

同や遠くもあはゆふて 西武

ぬるもあはゆふて 芭蕉

あはゆふて 除風

あはゆふて

あはゆふて 越人

あは

あはゆふて 伊勢 看妻

さぬくや余のこころも時を  
敷を生て寝ぬ不又みるあふ  
むしこのめふち花ぬさ川のね  
法てふ小袖もそ見る女の事  
さけめ煉うたひのこころなり

除風  
長虹  
文淵  
冬文  
心棘

六宮粉黛無雙顔色

お月宮の稲妻はさやけの乳  
一かたりり人傳のぬるあつり外

長虹  
尚白

さけしよあふ

つまれしとあるやと終世あは  
ちりちりちり落るるのやま  
妻のあゝとん 結（糸）送り  
松の甲時ぬれ旅のこゝろりうふ  
おあもこい大蛇をぬていらあも  
うたぬぬ大蛇消ころふの終  
山細ふものさつやき

荷今  
小春  
越人  
俊似  
舟泉  
嵐篋  
松芳

らぬ〜  
おそろ〜  
冬松  
昌碧

無常

未期ふ

なるを〜  
守武

常中迅速

吹川〜  
傘下

茶期り

南〜  
元順

塚

松板の浮腫〜

りり〜

播〜  
荷守

い〜

自の上〜  
去來

ある〜

あ〜  
荷守

世よりあへて妻のあはれなり

水やよりの相の二葉とよふ

野水

辞せ

あそび終也竹笠色川水主コ舟

子小あふれりら出

似る衆の何れも生てかえし魂り

落梧

一原野山く

あそび終也小町うちの地はるまよ

釣雪

妻の遠きふ

女形をさるその里人を終らぬむ

自愧

未下く妻のたまかりを

いぬま

形終すやかへてひるりおは

去來

コ舟のあはれり

その人形断らぬなる決のくれ

あふあそび終る子の衣襟

其角

たつ子や元とるい合ふは然の昔 尚白

ある人此道者なり

煙火もるぬやなまたの章ある言 芭蕉

縁ありみよありある人を

あはるのこゝあはるう小清原あり 嵐弾

るはし種くぬたぬと云佛の生るの月 <sup>加賀</sup>小春

曠野集卷之八

釋教

伴物かゝる

邪智やた母はもかけの涅槃像 芭蕉

肩とくある舟木所(きり)をんを 菖彈

西行上人五百歳忌ふ

ものろりと有ぬ妙る様事 荷今

たれ——途るふ

蓮翹やまきつ月少くもる通り  
 うて首小蛇の草やほ二王外  
 木履もく僧も者きりぬのを  
 流りのひとを扇く敷くものさ  
 荒ふゆ傍とて侘へ垣さこのな  
 其角  
 越人

真意つちのつ辰の歳時を百東照まの別也  
 僧云の虫房に意ある大匠近て度執事法苑の簿  
 の信白とてさうまをまを徳園小のりて  
 市區のこて法を

世の房の種皮取しとて出に塵をれなく暗きおたり  
 あり虫成伸のふふゆりてまのひあす白界がむあひの  
 不強くとありあさたあるあひのま

鏡もとの屋上のさくく候ふり梨  
 古寺やのらさぬあひの草草  
 一井  
 俊似  
 一井  
 千箇  
 一井  
 蕪葉

心  
 心  
 心

あふらふて

清佛の目よまき色はてふまのふみ  
清仏はては清しきくあらふ

芭蕉  
尚白

高野ふくく

腰のあふらふれ義をかりの心か  
糸ふ来て巻一日は清ありて

一雲  
一笑

十如是

おのふらふのこてある清水か

荷今

印身印佛

其度限のよる夜とふ人の佛の如  
は一疾こむや清の絶むる衣衣  
おとらくやいとしてあるとて  
わがまの力ととるむしめりれさよ  
石筆小紋臨鬼の棚のころえか  
現を舟とり酒をと自向をり  
たまあつり道よとある野菊か

愚益  
草弾  
荷今  
探丸  
文里  
亀洞  
卜枝



接納のそとらりてんねの松 釣聖  
平等施一切

接納ふまきり火張とて免たり 俊似  
箱毒り大佛木のまじり外 荷今  
植越下道守扱くまををの事 卜枝

ある人回時の景物なりとてある鶴と  
鶴とを不圖こころを感——その  
あも鳥をこころをす

鳥くまぬら佛りあくハぬ々 荷今

ある寺の真のよ

燕も湯寺の教めつころを中 其角  
進こ生く坊をたりや目のあ 一井  
神の子ふ木綿をこころは原か 卜枝

人のあふふたりてぬち生まど  
はるふのこころをこころを  
衣巻くをれりりり一時ぬ 嵐彈

鎌倉の安国論寺にて  
ふくつこの波やあふ氷るえ 越人

古寺此學

暇之他處くくのあをえ道云

荷子

同

をちやあれた二主カス片 晚

俊似

いくるまをさくいん(ま)とき

一井

新を夜よりる人のころりや解敷

文潤

千観う鳥もゆせりー一年の書

其角

が樂五品七句

如寒者得火

坐の白くふじめの咳たけさみか

胡及

如裸者得衣

冬の日をほ括かへあまの衣

如商人得主

み六のあいてよびいよひいことか

如子得母

竹あてあ者いれつくさけけ

如渡得船

月此比隣の橋木さうりふり

如病得醫

かましくとら法おらん射る山を

如暗得燈

伏のよわたこい山をさうりふり

神祇

古きあやむとるあくる獅子尻

釣聖

二月廿五日を納り

たたららあやむの月此梅

荷寺

えんしくま梅あけおる火外

同

常と水あひてこと神のむめ

亀洞

上下のさうりあやむ神の梅

昌碧

行のあすうなりきり梅の井

釣聖

何とや神をたつ先を途へ梅の毛  
 雲をえれくある山をさかす神梅  
 月代もさるふと也梅の毛  
 門ありて梅の鴉は離たつみたり  
 結島つるおれ人の後れさくおれ  
 花よふあつて止葉乃木かた下るる葉  
 名の後川流つとるるさくくおれ  
 山は流の木の葉ふの才乃遊は  
 越人  
 舟泉  
 雨桐  
 重五  
 玄察  
 鉦可  
 李桃  
 好葉

ちとくをたあて神系のおれを海り  
 文鳥の竹枝のさるかたはさく  
 破扇一夜りふりす湯後水  
 川原をさるる花さるる花後水  
 こあくくおれの子おれく神樂舞や  
 此月のあはれ酒をさるるおれ  
 夕之終や神皇のこさるる酒筒  
 玄察  
 龜洞  
 未学  
 荷今  
 尚白  
 松芳  
 落梧

若宮奉納

くく、くくぬきも妙也、  
此の方中、  
能為川、  
かつくくみの  
橘花、

利重  
野水  
昌碧  
村俊  
卜枝

祝  
肩負、  
荷、

冬文

後、  
君、  
あ、  
い、  
予、  
先、

重五  
越人  
傘下  
亀洞  
同  
芭蕉

